

枕册子「時奏するいみじうをかし」の段に於ける本文校訂と語法

田中重太郎

- 一 こほこほと・こほめく
- 二 弦打ちなどして
- 三 何家の何がし
- 四 あてはかなる

一 こほこほと・こほめく

春曙抄（池田龜鑑博士校訂岩波文庫本）二百五十五段は、
時奏する、いみじうをかし。いみじう寒きに、夜なかばかりなどに、こほく／＼とこほめき、沓すりきて、弦打ちなどして、「何家の何がし、時丑三つ、子四つ」など、あてはかなる聲にいひて、時の枕さす音など、いみじうをかし。「子九つ、丑八つ」などこそさとびたる人はいへ。すべて何もく／＼四つのみぞ枕はさしける。

（下巻 七七一七八頁）

とある有名な文であるが、右の本文に見える「こほく」と「こほめき」「弦打ちつるなどして」「何家たけの何がし」「あてはかなる」の五つの語句について心おぼえを記しておきたい。

順序として、まづこの段の本文を、現存各系統諸本より抄出して考へることとする。

(一) 傳能因所持本系統

時奏するいみじうをかし1さむきに夜中はかりにこほく1とこほめきくつすりてきてつるうちなとしてなんけのなにかし時うしみつよつなと時のくぬさすをとなといみじうおかしねうしやつなとこそさとひたる人はいへすへてよるのみそくぬはさしける (三條西家舊藏本 下卷 九十表8—九十裏1)

○異文 ① 富岡家舊藏本・高野博士舊藏本・十行、十二行、十三行各古活字本・慶安刊本などすべて「いみじうさむきに」とある。

② 慶安刊本この一字がない。

(二) 三卷本系統

時そうするいみじうおかし いみじうさむき夜中はかりなとこほく1とこほめきくつすりてつるうちならしてなむ2なのなにかし時うしみつねよつなとはるかなるこゑにいひて時のくいさすをとなといみじうおかしねく2のつうしやつなとこそさとひたる人はいふすへてなにもくたよつのみそくいにはさしける (宮内府圖書寮藏本 下卷 四十四裏10—四十五表6)

○異文 ① 刈谷圖書館本「くつすりきく」とある。

② 底本以外の諸本すべて「なん」とある。

(三)前田家(四冊)本

時そろするいみしうおかしいみしうさむきに夜中はかりなとにこほく〜とこほめきくつすりきてつるうちならしてなけのなにかし時うしみつねよつなとはるかなるこゑにいひてときのくひさすをとなといみしうおかしねみつうしよつやくつるとこそさとひたる人はいふすへてよるのみそくひはさしける (正月一日の巻 卅八裏4)

9 活字本 一五三頁)

(四)塚本(宸翰本)系統

該當本文がない。

以上の諸本文を比較する時、いま採りあげようとする「こほく〜と」「こほめき」「弦打ちなどして」「何家の何がし」「あてはかなる」の五つの語句に於いて、「こほく〜と」と「こほめき」とは現存各系統諸本にすべて異同なく存し、「弦打ちなどして」は、

① つるうちなどして 傳能因所持本系統

② つるうちならして 三卷本系統

③ つるうちならして 前田家本

と二つの異文があり「何家の何がし」は、

① なんけのなにかし 傳能因所持本系統

② なむ(または「なんじ」)なのなにかし 三卷本系統

枕冊子「時奏するいみじうをかし」の段に於ける本文校訂と語法

③ なげのなにかし 前田家本

の三異文を有し、また「あてはかなる」は、

① 闕 文 傳能因所持本系統

② はるかなる 三卷本系統

③ はるかなる 前田家本

となつてゐることを知るのである。

さて、まづ「こほこほと」「こほめき」の語から考へてゆきたい。「こほこほと」の意義が、「藪藪物ハ鳴リ響キ、又ハ、音發ツニ云フ語」。(大言海)「鳴リ響くにいふ語」。(大辭典)と説かれ、「こほめく」の語の意義が、「コホコホト、音發ツ」。(大言海)「こほこほと音す。又、ひしめく」。(修大日本國語辭典)こほこほと音する。(大辭典)

などと諸辭書に説かれてゐることに特に異論はないのであるが、「こほこほと」「こほめく」のよみ方をさきに考へたいのである。すなはち、この語は現在一般の枕冊子諸新註に訓まれ、また大言海に訓まれてゐる如く「こほこほと」あるいは「こほめく」と清んで呼ばれたかどうかの問題である。辭書を檢すると、訂修大日本國語辭典には、「こほこほと」を、こほ、こほ(名、副)鳴り響く音にいふ語。蜻蛉日記中「いささかまどろめば、舟ばたをこほこほと打ちたたく音に、われをしもおどろかすらんやうにぞ覺ゆる」榮華御裳着「此のたつづみといふ物は例のにも似ぬこちちして、こほこほとぞ鳴らしくめる」こほ、こほ(名、副)(一)雷などの鳴り轟く音にいふ語、蜻蛉日記中「空くらきまつ風音たかくて、神こほこほなる」源夕顔「こほこほとなるかみよりもおどろおどろしく」字鏡集「軋 コホメク。トトメク。トドロク」(二)

暖などする音にいふ語。ごほんごほん。枕十「いみじう寒きに、夜なかばかりなどに、ごほごほとごほめき」

と二語三類にわかたてくはしく説いてゐるが、他の二大辭典は前掲の如く一語として考へて居る。次に「ごほめく」は訂大日本國語辭典に、これを「ごほめく」とよみ、大辭典は、「ごほめく」「ごほめく」の項に、いづれも「||ごほめく」と記し、その解を「ごほめく」の條に行つてゐる。この二語に對する枕冊子の註釋書のみは、管見に入つたものでは、

ごほごほと 盤齋抄・新釋(永井一孝氏)

ごほごほと ナシ

ごほごほと 旁註・集註

ごほごほと 春曙抄・詳解・評釋(金子元臣氏)・評釋(内海弘藏氏)・全釋・評釋(末政寂仙氏)・繪卷(尾上八郎博士)・有朋堂文庫(塚本哲三氏)・校註(山岸德平氏)・藤村博士本

ごほめき 盤齋抄・旁註・通釋・新釋(永井一孝氏)・評釋(内海弘藏氏)・口譯新註

ごほめき 詳解

ごほめき 有朋堂文庫(塚本哲三氏)・集註

ごほめき 評釋(金子元臣氏)・全釋・評釋(末政寂仙氏)・繪卷(尾上八郎博士)・校註(山岸德平氏)・藤村博士本・評釋(青木正氏)・校註(吉澤義則博士)

の如くよんであるが右の中いづれに従ふべきなのであらうか。

思ふに、「ごほめき」の「ごほ」は「ごほごほと」の「ごほ」と同じく擬音語とか擬聲語とかいはれるもので

はなからうか。いま増補雅言集覽から「ごぼめく」(同書では「ごぼめく」と訓んでゐる。)の例を引くと、

「枕、二ノ八」またやりどなどあらくあくるもいとにくしすこしもたぐるやうにてあくれればさうじなどもたをめかしてぼめくこそしるけれ

〔同、三〕名對面ハテシ所瀧口の弓ならし杵の音そゝめき出るに藏人のいと高くふみごぼめかして丑寅のすみのかうらんに高ひさまづきとかや云々

「榮、浦々」とのゝ内にさうして年頃さふらひつる人々云々よろづをこぼちはらひごぼめきのゝしりてもて出はこびさわぐを

補「落窪、一」かのへやにいきてこれあけむゝいかでゝといへば云々うちごぼめかしてのゝしれば

とあり、前掲諸辭書もこの四例の中のいくつかを引いてゐるが、大辭典には、

落窪・二「しひてごぼめきてひちひちときゆるはいかなるにかあらむとうたがはし」の例もあがつてゐる。

以上の諸例を通覽するに、「ごぼめく」(カ行四段活用動詞)としての例は、「枕、二ノ八」、「榮、浦々」、落窪・二の三例になり、この中の第一例の本文は三卷本によると、

やり戸をあらくたてあくるもいとあやしすこしもたぐるやうにてあくるやうにしてあくるはなりやはするあしうあくれはさうしなともごぼめかしうぼとめくこそしるけれ(第二類諸本異同なし。ただし、第一類本はこの段を闕いてゐる。)

とあり、前田家本は、

又やりとなどをあらふたてあくるもいとあやにくしすこしもたくるやうにてあくるはなりやはするあしくあく
れはさうしなともこほめくかし

とあり、塚本（宸翰本を含む）にも

つまとやりとなともあらくはなちあくるはいとうたてありしやうしもさぞあるすへてなに事も心おくれたりと
みる人はいとくこそおほゆれ

とあつて、「たをめかしこほめく」といふ本文はそのまま信ぜられる本文でないことがわかる。念のため傳能因
所持本系統諸本をみると、このあたり

① さうしなともほめかしこほめくこそしるけれ
(三條西家舊藏本・十行、十二行各古活字本)

② さうしなとほめかしこほめくこそしるけれ
(十三行古活字本)

③ たうしなとたほめかしうほとめくこそしるけれ
(慶安刊本)

とあり、「こほめく」の本文は三條西家本まで遡り得るからまづよいとしても、春曙抄に見え、現在一般に行は
れてゐる「たほめかし」「たをめかし」の語は、實は慶安刊本あたりから頼れて出来た末流の本文であり、信ず
べからざるものだと知るのである。この「たほめかし」は、夙に武藤元信翁の通釋にしりぞけられたのであるが
そのしりぞくべき理由を明記しておかれなかつたためか、現行諸辭書はすべてこの語を、この枕冊子一例によつ
て項を設け、解説してあり、最新刊の枕冊子註釋書や校訂本にも採用せられてゐる状態であるが、これは今後絶

對にしりぞけねばならぬ本文である。(慶安刊本には、「藏人のいと高くふみこほめかして」を「藏人のいと高くふみたほめかして」などと「こ」を「た」と誤つたものが他にもある。小著「枕冊子研究」参照。)

ともかくも、「こほめく」の例はかうして並べることができた。次に、「こほめく」と語系を同じくすると思はれる「こほこほと」の例を同じく増補雅言集覽から引用して、「こほめく」の意義をたしかめたい。

〔榮、御着装、十三〕此たつとみといふ物は例のにもぬこちしてごほくとぞならしいくめる

〔宇津保、國譚、下ノ廿六〕御けふそくにたはふれかゝりてこしをつきつ御屏風御几丁もごほくとたふれぬ

〔蜻蛉日記、中ノ下〕鶺鴒カヒノ所 いさゝかまどろめば舟はたをごほくと打たゝくおとにわれをしもおどろかすらんやうにぞ覺ゆるあけてみればよるのあゆいとおほかり

〔同、同〕これかれさわぎて日頃みだれがはしかりつる所々をさへごほくとつくるを見るにいとかたはら痛く

おもひくらすに

〔同、中ノ中〕そらくらきまつ風音をかくて神ごほくなる云々雨もやいたく降出とおもへば神のなりつる音になん出てまうでつるといふをきくにも

〔同、上ノ下〕またひるよりごほくはたはたとするぞひとりゑみせられてあるほどに

補源、夕顔、十九〕ごほごほとなるかみよりもおどろくしく

〔同、紅葉賀、廿七〕屏風のもとによりてごほくとたゝみよせておどろくしうさわがする云々

〔源、朝顔、十二〕ごほくと引てじやうのいといたくさびにければ(門の扉也)

「枕、十一ノ十四」いみじうさむきに夜なかばかりなどにほく〜とほめまくつすりきて
とみえる。一々の作品について探せばもつとあるであらうが、いまはしばらくここに示された例によつて、「こ
ほこほと」ならびに「こほめく」の訓みと意義とを考へたい。

「こほこほと」の訓みと意義とについて最もくはしく説いてあるのは、既掲^修大日本國語辭典であつた。それは、
「こほこほと」と「を」こほこほと」と「と」こほこほと」と「と」にわかち、それぞれ用法を別に示したものであつた
がこれは、「^{増補}語林倭訓栞」の次の如き記載によるところが大きいと思はれる。

○こほく〜 落窪物語に腹こほく〜と鳴とみゆ腹中雷鳴のさま也源氏にこほく〜と鳴神よりも見えたるは直
に雷の鳴をいへり、（上卷 八〇二頁）

〔増補語林〕

こほく〜 榮花御裳着、此たつみといふ物は（筆者註、以下用例重複するゆゑ一部略する。）○空國讓御けふそくにた
はふれかゝりて（略）、同俊かけいさゝかまとらめは舟はたをこほこほと（略）

こほく〜 造營の音、または處から白の音にもいへり、ほ字は半濁にをと云やうにとのふるなり、蜻蛉日記中、
七月三日になりにたり、晝つかた渡らせ給ふへし、此にさふらへ、さなん仰事有つるといふ者どもく也、來た
れば、是彼さわぎて、日頃みだれがはしかりつる所々をさへこほく〜とつぐるを（略）（八〇二―八〇三頁）

さて、^{増補}雅言集覽にあげられた十の「こほこほと」は、鼓の音・屏風などの倒れる音・舷をたたく音・修繕造
作する音・雷の音・門の扉の音などをあらはし、（源氏物語に見える「こほこほと」は前掲三例がその全用例で

ある（それにここにとりあげる枕冊子の場合とを見出すのである。また「こほめく」には落窪物語に見られる腹鳴の例があつた。

枕冊子のこの「こほこほと」の意義については、修訂大日本國語辭典の如く「こほんどほん」といふ咳の聲の形容だと見る説もある。それは、春曙抄に「時をそうする官人のしはぶき也」と註し、旁註に「官人のしはぶき也」と見えるのはじまるのであるが、新註は「杵をする音のこほくと、こほめき（するゝ音なり）聞えてあるに」（詳解）「杵を踏み轟かす音」（新釋「永井一孝氏」）「杵摺の音なり。濱臣の装束の音といへるはいかゞ（評釋「金子元臣氏」）とあるのを以て代表させ得、それが正しい説と考へられるのである。この時代に撥音表記未發達のためそれを表記しない例は數多あるが、「こほこほと」を「こほんどほんと」との咳の聲とみるのは如何であらう。これは、他に一例でも確實に咳の聲をあらはした用法が発見できるまでは従ふことができないのである。また、清水濱臣の装束の音といふのも、「こほこほと」が他に適用せられてゐる場合から推すにあまりに大袈裟過ぎ、強大に過ぎるやうに思はれて、この一例のみを以てしてはこれもやはり首肯することができないやうに思はれる。

しからば、「こほこほと」は杵の音であらうか。筆者はこの場合さう考へてまじさしつかへないものと信ずる。それはほほ従來の通説でもあるがなほこの語が次の「こほめき」に關聯してゐることに氣づき、「こほこほと」は、今日の音としては「ごほごほと」と訓めはしまいかと考へたのであつた。

「こほめく」が「こほこほ」の擬音から來たらしいことは、「ふめく」「ぶめく」とよむべきか——宇治拾遺物語卷七「長谷寺參籠男預利生事續」ふめきてかほのめぐりにあるをうるさければ木のえだをおりてはらひすつれども、猶たとおなじやうにうるさくふめきければ、とらへてこしをこのわらすぢにてひきくよりて……ほかへえいかでふめき飛まはりけるを」新訂國史大系第十八卷一三二—一三三頁——が「ふ（ん）」といふ唸り聲から生じたことや、同じ宇治拾遺物語卷十藏人頓死の事の條の「臺盤にひたひをあててのどをくつ／＼とくつめくやうにならせば」（同一八六一—一八七頁）とある例などからも判斷し得る。

「こほめき」がこの場合、「くつすり」來る音をあらはしてゐることに疑はあるまいが、それは「こほめき」と訓むべきではあるまいかとの考をつづけてみる。もつとも、この頃のH音はF音であつたと思はれるが、語中語尾に來る場合所謂波行轉呼音で、それは、ヲと同じ發音になつてゐたやうである。（石山寺法華義疏訓點「長保年間」顏カヲの例などがある。ただし、例の天台宗に傳唱せられてゐる「法華經をわが得しことは薪樵り菜摘み水汲み仕へてぞ得し」の法華讚歎の「は」が今日にもfaと誦へられてゐることはさうした音が平安時代初期の發音といはれてゐるが。）したがつて「こほこほと」「こほめく」は、「こほこほと」「こほめく」であるとしても、「ゴラマト」「ゴラメク」などとよまねはならぬと思はれる。あるいはまた、この枕冊子の例だけから考へると、「こほこほと」と訓み、沓すりの音に適した音（現在、關西方言に「おこほ」と稱する古昔の沓に似た幼少女用の下駄（木履））があるが、その名は「こほこほ」と音するところから名づけられたものと思はれる（とみたいのであるが、ただ一つの用法を獨立させて他を推すのは危険だと思はれるのでしばらく、「こほこほと」「こほめく」と考

へてみたい。ただし、「こほめく」「こほこほと」「こほ」「こほつ」「こほる」「毀る意」の「こほ」と同じ語であるならば、或る時期に於いてさう發音せられてゐたとも考へられる。しかして、古事記上卷に見える「鹽許袁呂許袁呂邇畫鳴而」の「許袁呂許袁呂邇」も擬音語だと考へてゐるが、いま、ゴロゴロと表現する雷鳴や腹鳴を、昔コロコロとに近くいつた——少くとも「ゴ」と濁らずに「コ」と清んだ——のであつたら、「こほこほと」を「こほこほと」と清音に訓んでよいし、またさうよむべきであらうが、さうした點筆者は未だ十分に詳にし得ないのである。(元來の日本語の語頭に濁音がなかつたといふ事はこの時代のこのことばについてたいして援證を與へないであらう。)ただ、この冊子 すさまじきもの の段の、

又、必ず來べき人の許に、車をやりて待つに、入り來る音すれば、さななりと、人々出でて見るに、車やどりに入れて、轆ほうとうちおるすを、「いかなるぞ」と問へば、(岩波文庫本上卷 九六一―九七頁)

の「ほうと」やうちとくまじきもの段に見える、

大いなる松の木などの二三尺ばかりにて圓なるを、五つ六つほうくと、投げ入れなどするこそいみじけれ。

(下卷 一〇二頁)

の「ほうくと」は、落窪物語卷二の

顔つきただ駒のやうに、鼻のいらぎたる事かぎりなし。ひうと嘶きて引きはなれていぬべき顔したり。

の「ひうと」が「いままの」「ひんと」に近い音を寫してゐるといはれる——もつとも、これについては橋本進吉博士に「ひうと」は「い」とが正しい本文であるという説(國文學叢話 所收『馬の鳴き聲その他』)があり、所弘氏にも同様の説があ

る『いうなど』【日本古典全書月報】とは異り、「ぼんと」「ぼんぼんと」あるいは「ぼんぼんと」または「ぼんぼんと」の音を寫してゐるのであらうことは、この「こぼこぼ」や「こぼめく」が「こぼこぼ」と「こぼめく」であるいは「こぼこぼ」と「こぼめく」と呼ばれたのではないかと考へさせるのであるが。(落窪物語卷一の「かく立てるはなぞ、居侍れとて、笠をほうく」とうてば、尿のいと多かる上にかがまりぬ。」とあるのも「ぼんく」と「ぼんく」との例である。)

ハ行子音や古語の清濁の問題は複雑であり、推定が困難であるが、鎌倉時代のものとして、「あつまれる人ども一度にはとねらひたるまぎれににげていにけり」(宇治拾遺物語卷一 隨求陀羅尼籠額法師事)や「そこら立とまりて見けるものども一どにはつとわらひけるとか」(同、大童子鮭ぬすみたる事)「人みなはとわらひけり」(同卷五 或僧人の許にて氷魚ぬすみくひたる事)などの「はと」「はつと」は、當時おそらく「ふアツと」いはれてゐたと思はれるが、今日「わつと」と發音して居り、「戸をはたく」とたゞきけるに」(同卷二 晴明封藏人少將事)は「ばたく」と「ばたく」とであり「ほろく」と泣きて」(同卷一 龍門聖鹿に欲糞事)、「刀して薬ををしひらくに、ほろく」と、物どもこぼれておつるものは、ひらあしだ、古尻切、古わらうづ、ふる香」(同卷二 用經あら卷の事)などの「ほろく」と「ぼろく」と「ぼろく」とと表現するところであり、それがさう發音せられたのがいつ頃からなのか知らないがさう古くはないと考へられ、一方濁音は一般に古くなる程少いのが通常であるゆゑ「こぼこぼ」と「こぼめく」も、そのまま清んでよみたいのであるが、それには既述の如く雷鳴や腹鳴に「こぼこぼ」と「こぼめく」であらはずされても差支ないことが必要であり、それが認容せられるならば清んで訓み得ると考へられる。そして、類聚名義抄に、

裊 ヒチメク
コホメク

(法下 六)

とあるのは、「コ」や「ホ」の字に濁點が施してない點「コホメク」と清んでよまれたことを教へてくれるやうである。また、「ヒチメク」の語が、

濫 ヒチメク

(法上 四二)

徒合反カマヒスシ
トソ イフ タフトシ

カ、シ サハッル ヒチメク

(法上 四八)

とあるに證して、「コホメク」が音聲を形容した話であることが明らかになるであらう。ここに再び思ふに、「こほ」と「こほめく」は現代「こほこほと」(ゴヨゴヨト)「こほめく」(ゴヨメク)とよんでもいいが、平安時代においてやはり「こ」を清んでよまれたのではあるまいか。

なほ、参考のためその後氣づいた「こほこほと」「こほめく」について説いた古人の説を引いておく。

(一)「ねぎめのすさび」〔石川雅望輯〕一の卷

○夕がほの巻にこほくとなるかみよりもおどろくしくといへる所に湖月抄に孟津抄をひきて蜻蛉日記のかみこほくとなるとあるをひけり新釋には枕ざうしの庭の砂ごをふむくつおとをもこぞめかしといへるを引たり

按ずるにこほくといへる詞このほかにもあまたありうつほ物語國ゆづり下に御屏風御几帳もこほくとなふれぬと見えまた紅葉賀巻に屏風のもとによりてこほくとたくみよせておとろくしうさわがすに云々枕ざうしにやりどなどあくるもいとにくしすこしもたぐるやうにてあくるはなりやはするあしうあくればざう

じなどもたふめかしてほめくこそしるけれ朝顔の巻にこうくとひきてしやうのいといたくさひにければ蜻蛉日記上にまたひるよりこほくはたくとするぞひとりゑみせられてあるほどに見えたり (百家説林 續編 上巻 六二四―六二五頁)

(二) 〔増補俳言集覽 (井上頼だたし・近藤瓶城増補。但、この項増補なし。)

こほく ころく に同じホとロと通ず〔源氏夕貌〕 コボく と鳴神よりもをどろくしてふみとどろかすからうすのおとも云々、移山案、俗にゴボゴボ濁音によめるはあしゴボくと (ホの音はヲの如く) よめるがよし〔源氏をとめ〕ゴボくとひきて門をあくる音 こほく ゴ濁ホ清 病者の咳する音 (中 八七頁) こほめく 〔倭訓栞〕コボメク 壤チメク 義也 榮花物語によろづをコボチワラヒ、コボメキノ、シリと見ゆ枕草紙にあしうあくれば障子などをほめかしかコボメクと見え源氏に屏風たむむ音門のジャウをあくる音コボコボといへり又蜻蛉日記、源氏などになる神の音にもいへり新撰字鏡に磊をコボヘルとよめり (筆者註、これは倭訓栞の全文であるが、誤植などは正しておいた。) (中 八八頁)

(三) 〔松屋筆記 (小山田與清) 卷九十六〕

(十二) こほろと鳴ル 今昔廿七の十四語に大キナル鞍櫃ノ様ナル物ノ有ケルガ人も不_レ寄ヌにコホロト鳴テ蓋ノ開ケ_レバ云々古事記に鹽コホロくとカキ鳴_テと見え枕草紙にこほめくなども有 (國書刊行會本 第三 一二二頁)

二 弦打ちなどして

次に、春曙抄「弦打ちなどして」の本文を改めたい。これは、三卷本や前田家本に見える「つるうちならして」がおそらく正しい原文であることは前記異文を一讀して誰もが氣づくところであり、旁註、「詳解」、「新釋」(永井一孝氏)、「評釋」(内海弘藏氏)、「評釋」(末政淑仙氏)、「口譯新註」、「評釋」(青木正氏)などは「つるうちなどして」に據つてゐるが、夙に盤齊抄に「つるうちならして」とあり、「通釋」、「評釋」(金子元臣氏)などはその正しい本文を探られたがこれに従ふべきであらう。これを考へるには、四十七段、殿上の名對面こそ猶をかしけれの段に、

…：はてぬなりと聞く程に、瀧口の弓鳴らし、杳の音そよめき出づるに、藏人のいと高く踏みこほめかして、うしとらの隅の勾欄に、高ひさまづきとかやいふぬすまひに、御前の方に向ひて、後さまに、「誰々か侍る」と、問ふ程こそをかしけれ。…：(上卷一八三頁)

とあるのが参考になるであらう。「打ちなどして」でも決して意味の通ぜぬ箇所ではなく、「隨身も弦打して、絶えずこわづくれ」(源氏物語 夕顔)などの例もあるが、現在の本文批判の上から古い形態と考へられる諸本文の共有する本文であり、より自然な表現である「うちならして」に據るべきであらう。(前掲源氏・夕顔にも「弓弦いとつきくしくうちならして、…：」と見える。)

三 何家の何がし

「何家の何がし」(なんけのなにかし)は、現存傳能因所持本共通の本文であり、前田家本の「なけのなにかし」はその撥音略記の形態と考へられ、いづれも相當古い本文とみられる。しかし、「なんけのなにかし」をもしこのままでその本文を解釋してゆかうとすれば、古く盤齋抄が、

何家の何某と名謁て丑三つ子四つなと奏する事侍るを……

と註し、春曙抄に、

何家の何と名を名のる也

と説き、旁註に惟中が、

何がしの家の

と添註し、武藤翁が「○なんけのなにがし 先、名乗りて時を唱ふるなり」といはれたのが今日もなほ行はれてゐる如く、さうした説以外に説きやうがないであらう。ただ關根正直博士のみが、この難問に對し、見事に明解して居られるので、それを引くと、

〔頭註〕 なんけ千蔭翁古本一本によりてけの字を削れり

〔語釋〕 ○なんけ春何家の何と名のる也、補然らず。けは衍にて何の某なり。何とは官名を稱する事なり。禁中にて何家など唱ふる例なし。(集註六二四―六二五頁)

しかし、これは既掲現存諸本文によつて見られるやうに、單は「け」を削つて「なんのなにかし」となつてゐる本文はないのである。したがつて、この結論は従ふべきであるが、その解決方法は他にもとめなければならぬのである。筆者は、これを三卷本文の検討にたづねようと思ふ。

三卷本文は既掲の如くであるが、「なむむ（または「ん」）なのなにかし」の處置が問題である。從來翻印せられた校訂本として藤村作博士編「清少納言枕草子」によると、このあたり、

…弦つるうち鳴らして、「なん家のなにかし、時丑三つ、子四つ」など、はるかなる聲にいひて…

(二〇五頁)

と校訂し、

なん家——原本「なんな」とあり。

と頭註して居られ、山岸徳平氏編「校註枕草子」にも、

…弦つるうち鳴らして、「なん家のなにかし、時丑三つ、子四つ。」など、遙かなる聲に言ひて、…

(二三七頁)

と校訂してあつて、「なん家のなにかし」に對する特別の註を附して居られないが、この「校註枕草子」の前身たる「校註日本文學大系」第三卷には、

○なん家、何家の某なり。近衛の官人は先づ名のりして時を奏するなり。(六八三頁)
と頭註が施されてある。(ただし、本文校訂は「校註枕草子」と全く異同がない。)

すなはち、これらの二書では、「なんなの」を棄てて「なんけの」の本文に據られたのであつた。しかし、筆者は「なんなの」とある三巻本の本文を生かして、左の如く訓めはしないかと考へるのである。

…弦うちならしてなむ、「何のなにがし、時丑三つ、子四つ」など、はるかなる聲にいひて…

もし、右の私考が許されるならば、「なむ(または「なん」)なのなにがし」の「なむ」「なん」は係の助詞となつて生きるであらう。その結は「いひて」で消えて行つたのだと見られないであらうか。「何」(なに)を單に「な」といふことは、それが「なん」(何)の略記として多くの例を有することゆゑいま例をあげないが、ただここで問題は、「何のなにがし」といふことばである。官人の名乗は既掲 殿上の名對面こそ 一段の記事や源氏物語桐壺、夕顔などにも見えてゐるから明らかであるが、「何のなにがし」といふ語の用例を他に見出したのである。それが發見できれば、この拙い考はあるいは認め容れていただけれると思ふがいかがであらうか。なほ、「なんけの」と「なんなの」との異文は「け」と「な」との誤寫に基くものと考へられ、「なんけの」の撥音無表記の姿が前田家本の現形態なのであらうと考へられる。

四 あてはかなる

次に「あてはかなる」といふ形容動詞について考へたい。

この語の前後の一句が傳能因所持本系統諸本には闕けてゐるため遺憾ながら異同を參看できないが、既掲の本文に於いて、この語が脱落を埋めるため誤つたつくりられた語句であることは諸本の本文を對校していただくこと

によつて明らかである。すなはち、三巻本にも、前田家本にも、
はるかなる……

とみえるが、これはおそく清少納言の原文にもさうあつたのであらう。それが、傳寫の上の誤から、

(イ)はるなる……

または

(ロ)はかなる……

となつたのである。(イ)にしても(ロ)にしても意味が通じない。しかも「る」と「か」とはほとんど區別のつきにくい文字であつて、「はかなる」の本文に困惑した後人が、下へつづく「こゑにいひて」につづけるため

あてはかなるこゑにいひて……

と「あて」を補つて改竄したのが、春曙抄の原據本の姿であつたのであらう。

勿論「あてはかなる」は伊勢物語に、「あてはかに」は源氏物語帯木、夕顔などに、また「あてはかなり」は蜻蛉日記にその例があり、この枕冊子の用例とても必ずしも不自然な場合ではない。然ればこそ、春曙抄、以下「詳解」、「通釋」、「新釋」、「評釋」、「集註」、「全釋」、「口譯新註」など現行代表註のすべてがこれに據られたのであつた。しかも、「口譯新註」には「○あてはか 近衛の武人は、いづれも良家の子弟なればなり」などと説かれた。けれども、現代に於ける枕冊子の本文批判の上からみてこの本文は嚴にしりぞけられねばならないことは言を俟たぬところである。盤齋抄が夙に採つて來た「はるかなる」の本文は、「一本」とか「或本」とかの

位置で評價せられるべきでなく、原態若しくはそれに近い本文として生かされねばならないのである。(旁註は、慶安刊本などと同じくこのあたり關文である。)そして、「あてはかなる」の枕冊子の用例は、今後諸辭書から必ず除かれねばならないであらう。

以上至らぬ考證であつたが、この一段に於ける「こほこほと」「こほめき」「つるうちならして」「なむなのなにかし」「はるかなる」の五つの語句についてその本文と語法とを考へてみた。(昭和十八年稿)

十年前の原稿をとり出して責をふさいだが、はづかしいのである。なほ、新刊の枕冊子註釋書中、小西甚一氏の「枕冊子新釋」には、「こほこほと」の本文に對して、「koffo koffo」と通解してあり、「すさまじきもの」の「ほうと」について「擬聲語。當時、撥音は明らかに認められておらず、假名「ん」も無かつたらしい。それで「D」音は、その音に近くと考へられた「つ」で表記した。「ほ」は、當時、兩くちびるを軽く合わせた「F」だつたが、それでは撥音効果がうすいし、P音も普通は存在しなかつたから、濁音のbと考へたい……」(四〇頁)と述べてをられる。また塩田良平博士の「枕草子評釋」では「こほく／＼とこほめき」に對して、「濁音表記が省かれている擬聲語であらう。ゴボゴボか。沓の音、べつに咳の音、衣ずれの音などとする古註があるがいがが。「こほめく」は「こほく／＼」の動詞化。(六一七頁)と頭註してある。